

目次

前書き	…	3
謝辞	…	5
本書の使い方	…	8
[第1章] なぜフィルムを保存するのか	…	9
[第2章] フィルムとその劣化段階を理解する	…	15
[第3章] フィルムの扱い方とインスペクション	…	27
[第4章] キュレーターの役割	…	42
[第5章] 複製	…	52
[第6章] 収蔵		
[第7章] カタログニング		
[第8章] 法的問題		
[第9章] アクセス		

付録

参考文献

全米映画保存基金について

本書は「Film Preservation Guide: The basics for archives, libraries, and museums」(NFPF/全米映画保存基金 2004年)の日本語版です。日本での使用に際して最低限必要と思われる追記事項は赤字で示しました。オリジナル(英語版 © 2004 National Film Preservation Foundation)はNFPFのウェブサイト: www.filmpreservation.org からダウンロードできます。

映画保存協会による和訳、出版及びウェブサイトへの掲載を許諾して下さった全米映画保存基金(とりわけデイヴィッド・ウェルズ氏)に心より感謝いたします。

画像提供: 以下に指定のあるものを除いて、すべての画像はバーバラ・ギャラツソ及びL. ジェフリー・セルズニック映画保存学校/ジョージ・イーストマン・ハウスからご提供いただいた。

アメリカ自然史博物館 (p94)、カリフォルニア・パシフィック・メディカル・センター (p57)、チェイス社 (p12 中央と右)、デューク大学 (p48 上)、テキサス大学 ハリー・ランソム・ヒューマニティーズ・リサーチ・センター (p84)、フロリダ映像アーカイヴ (p91)、ロチェスター工科大学イメージ・パーマネンス・インスティテュート (p10 上)、米国議会図書館 (p48 下と p51, p63, p87)、Minnesota Historical Society (p92)、National Center for Jewish Film (p90)、Nebraska State Historical Society (p69, p73, p74)、ノースイースト・ヒストリック・フィルム(裏表紙、p62 下、p76, p85)、オクラホマ歴史協会 (p5)、Sabucat Productions (p93)、UCLA Film and Television Archive (p86)、University of Alaska Fairbanks (p40)、University of South Carolina Newsfilm Library (p89)、Visual Communications (p58)

カリフォルニア大学パシフィック・フィルム・アーカイヴ(裏表紙)

前書き

本書は、映画フィルムを所蔵する諸機関を映画保存の世界に導くためのものである。文書館・図書館・博物館で経験を積んだ職員や映画保存組織で働く職員は、必ずしも技術的な専門教育を受けているとは限らない。そういった「初心者」向けの入門書である。

文書館・図書館・博物館にとって、映画保存は比較的新しい取り組みである。映画といえば長いあいだ、いわゆるハリウッド映画を意味し、ごく限られた組織が保有するものという誤認がまかり通っていた。しかしここ数十年のあいだに、劇映画以外の映画にも歴史的かつ文化的な価値を見出そうとする研究が出現し、地域性の高いドキュメンタリー、アマチュア・フッテージ、ニュース映画、科学映画、派兵の記録映像、政治広告、教育／啓蒙映画、アヴァンギャルド作品なども収蔵品と見なす研究機関が増えつつある。ところが保存についての専門書の出版ペースは、映画を収集する組織の躍進の勢いに追いついていないのが現状である。

映画保存プログラムに着手する際に、専門家が身につけているべき知識とはいったい何だろうか。全米映画保存基金（NFPF）は2002年、ロチェスター工科大学のイメージ・パーマネンス・インスティテュート（IPI）とジョージ・イーストマン・ハウスの L. ジェフリー・セルズニック映画保存学校に相談を持ちかけた。図書館情報資源振興財団（CLIR）と映像アーキヴィスト協会（AMIA）の地域視聴覚アーカイヴ・グループの何名かがこの議論に加わってくれたおかげで、視野はさらに広がり、フィルムの管理に責任を持つ個々の職員に映画保存を「わかりやすく説明する」ことの重要性に、誰もが賛同の意を表した。

上記のメンバーはアンドリュー W. メロン財団から助成金を得て、専門家向けの 2 冊の出版物を上梓するに至った。「文書館・図書館・博物館のためのフィルム保存入門」は NFPF が執筆を指揮し、映画フィルムの取り扱い、判別、複製、収蔵について、さらには、映画フィルムの命を脅かすことなく閲覧を可能にするための実践的なアーカイヴ活動の基礎をまとめたものである。マルチメディア・コレクションの責任者のための「IPI Media Storage Quick Reference (未訳)」は、映画フィルム、写真プリント、ガラス乾板、インクジェット印刷、音声テープ、ビデオテープ、CD、DVD の保存など広範囲をカバーし、収蔵方法を解説している。

我々はこれら 2 冊の手引きを編さんする過程で、読者に呼びかけ、対話方式で改訂を加えていくことにした。当初の出版計画をまとめた後、デューク大学とミネソタ歴史協会のミネソタ歴史センターにおいて、ニーズ評価のためのワークショップを催した。参加対象者は各組織の収蔵品の責任者やフィルム保存プログラムに着手したばかりの職員らであった。2カ所で開催されたワークショップの参加者は「こんな出版物が欲しい」と

いう要望を出し合い、本書の草案づくりに尽力した。利用者の立場から求められたのは次のような項目である：何らかの決定を下す際の指針となるもの、トラブル解決のためのアドバイス、段階を追った解説、ケース・スタディー及び「現実に即した」事例、そして最も重要なこととして、技術的な専門用語を回避し、映画保存活動の大観を示すこと。極力こうした提案を実現するよう努めた。

内容をさらに精査し、バランスを良くするために、ジョージ・イーストマン・ハウスの L. ジェフリー・セルズニック映画保存学校の学生たちにもこの 2 冊を査読してもらった。学生たちは本書に新たな視点を与え、内容や手段の改善に役立つ意見も彼らから多く寄せられた。ジョージ・イーストマン・ハウスのスタッフは本書に添える画像も提供してくれた。

ほかにも本書はあらゆるところで査読された。各章ごとに議論を重ね、編集委員会が改訂をおこない、結果を技術系の専門家に送り、さらに校閲を受け、改定を重ねた。多くの組織から事例紹介とそれにまつわる画像を提供してもらった。完成に向けて、ニーズ評価のセッションに参加したのと同じ面々がボランティアとして草案に目を通し、最終版を仕上げた。数多くの個人、団体の貢献によってこの出版物が世に出たというのも、決して大仰な表現にあたらないうら。

幅広い層に配慮したつもりではあるが、本書に書かれているいくつかの実践例に反対意見を述べる専門家がいてもおかしくない。何れにしても、様々な手段の中から、本書の読者にとって最も適切と思われる方法を選択したことに変わりはない。今後も実践内容は変容していこう。しかし、いくら技術が進歩しても、文書館・図書館・博物館の職員すべてが従うべき規則の核となるものは根強く残るに違いない。

映画保存の世界は日進月歩である。本書は、フィルムを所蔵する地域の文書館、歴史資料館、図書館、博物館などで働く初心者のために最新情報を集約し、まず何から手を付ければ良いのかを初めの一步から解説している。「フィルム保存入門」が、フィルム保存のコミュニティーに新たに加わる人々の背中を後押しし、所蔵すべきフィルムを守り残すため、行動を起こす契機となれば幸いである。

全米映画保存基金代表
アネット・メルヴィル

謝辞

「フィルム保存入門」は、以下の皆さまの励ましとご支援によって実現に至りました。

アンドリュー W. メロン財団

デイヴィッド・フランシス

監修者として本書の内容を技術面から改善し、ニーズ評価ワークショップでの論議や L. ジェフリー・セルズニック映画保存学校での試用セッションを先導。

はじまりから完成まで、プロジェクトを通して尽力したのが以下の編集委員のメンバーである。本書の完成まで忍耐強く時間を費やしてくれた。そ貢献は賞賛に値する。

アビー・スミス (図書館情報資源振興財団)

カレン・グリーン (デューク大学)

パオロ・ケルキ・ウザイ、キャロライン・イエーガー (ジョージ・イーストマン・ハウス)

ジャン=ルイ・ビゴルダン (ロチェスター工科大学 イメージ・パーマネンス・インスティテュート)

ボニー・ウィルソン (ミネソタ歴史協会)

ポール・アイズロツホル (ネブラスカ州歴史協会)

ドワイト・スワンソン (ノースイースト・ヒストリック・フィルム・アーカイヴ)

ほかにも数多くの人々が、出版に際して重要な役割を果たした。ニーズ評価の輪に加わったのは以下のメンバーである。

Debra Elfenbeine (アメリカ・ダンス・フェスティバル・アーカイヴ)

Barbara Mathe (アメリカ自然史博物館)

Elizabeth Barret (アパラシヨッフ)

Leslie Calmes (アリゾナ大学 クリエイティヴ・フォトグラフィー・センター)

Erin Foley (サーカス・ワールド博物館)

Suellyn Lathrop (イースト・カロライナ大学)

Jon Williams (ヘイグリー図書館/博物館)

Lynn Smith (ハーバート・フーバー大統領図書館/博物館)

Glenn Small (ジョンズ・ホプキンス大学)

Rachael Stoeltje (キンゼイ研究所)

Andy Lucas (メイヨー財団)

Katy Wood (オートバイ殿堂博物館)

Michael McLaughlin (全米芸術基金)

Steve Massengill (ノース・カロライナ州立アーカイヴ)

Bill Moore (オクラホマ歴史協会)
Steve Wilson (テキサス大学 ハリー・ランソム・ヒューマニティーズ・リサーチ・センター)
Julie Arnott (サザンイースタン・ライブラリー・ネットワーク)
Ginny Daly (サザン・ハイランド・クラフト・ギルド)
Connie Brooks (スタンフォード大学図書館)
David McCartney (アイオワ大学図書館)
Al Lathrop (ミネソタ大学)
David Boutros (ミズーリ大学)
Jill Vetter (ウォーカー・アート・センター)
Mark Peterson (ウィノナ・カウンティ歴史協会)

ジョージ・イーストマン・ハウスでは、以下のスタッフが本書に添える画像の手配、本書の試用、技術面での情報提供を通して協力してくれた。

ジャレット・ケース、カレン・エヴァーソン、バーバラ・ギャラツソ、ケリー・ヒックス、チャド・ハンター、アンソニー・ラバット、デボラ・ストイバー、ジェフ・ストイバー、エドワード・ストラットマン、ダン・ワグナー、ティム・ワグナー

手引きの草案を閲覧した学生は以下の通りである。

Susan Busam, May Dea, Andrew Lampert, Diana Little, Ember Lundgren, Brianne Merkel, Robert Nanovic, Heather Olson, Brent Phillips, Magnus Rosborn, Alexandra Terziev, and Benjamin Tucker

加えて、以下の学生の協力も受けた。

Daniel Blazek, Brendan Burchill, Donna Ellithorpe, Eric Green, Annette Groschke, Laura Krasnow, Siusan Moffat, Nathan Moles, Christina Nobles, 岡村あゆの, Loubna Regragui, David Rice, Norberto Rivero Sanz, Jennifer Sidley, Marcus Smith, Anna Sperone

ほかにも草稿を査読し、情報を提供してくれた協力者は少なくない。以下の人々は、とくに技術面で貴重な提言をしてくれた。

Robert Heiber (チェイス社)
Ralph Sargent and Alan Stark (フィルム・テクノロジー社)
Peter Z. Adelstein, Karen Santoro (ロチェスター工科大学 イメージ・パーマネンス・インスティテュート)
Ken Weissman (米国議会図書館)
John Carlson (モナコ・フィルム現像所)
Alan F. Lewis (米国公文書記録管理局)
Grover Crisp (ソニー・ピクチャーズ)

Roger L. Mayer (ターナー)
Eddie Richmond (UCLA フィルム&TV アーカイヴ)
Paul Eisloeffel
Eric J. Schwartz (Smith & Metalitz L.L.P.)
Rick Prelinger (全米映画保存基金)

専門分野について、あるいは特定のコレクションについて情報を寄せてくれたのは以下の人々である。

- Josef Lindner (映画芸術科学アカデミー)
- Dirk Tordoff (アラスカ・フェアバンクス大学 アラスカ・フィルム・アーカイヴ)
- Norma Myers (イースト・テネシー州立大学 アパラチア・アーカイヴ)
- Janice Simpson (映像アーキヴィスト協会)
- Katherine Nyberg (ミネソタ大学 ベル自然史博物館)
- Carol Brendlinger (カリフォルニア・パシフィック・メディカル・センター)
- Steven Davidson (フロリダ映像アーカイヴ)
- James Reilly (ロチェスター工科大学 イメージ・パーマネンス・インスティテュート)
- Jim Hubbard (インディペンデント・メディア・アーツ・プリザベーション)
- Gregory Lukow and George Willeman (米国議会図書館)
- Jennifer O' Neill (MIT Museum)
- Steven Higgins (ニューヨーク近代美術館)
- Miriam Saul Krant and Sharon Rivo (ジューイッシュ・フィルム国立センター)
- Nancy Goldman (カリフォルニア大学 パシフィック・フィルム・アーカイヴ)
- Rick Utley (プロテック)
- Jeff Joseph (サブキャット)
- Lisa Scholten (サウス・ダコタ州立大学 サウス・ダコタ美術館)
- Charles Hopkins (UCLA フィルム&TV アーカイヴ)
- Ben Singleton (サウス・カロライナ大学ニュース映画ライブラリー)
- Linda Thatcher (ユタ州歴史協会)
- Jeff Liu (ヴィジュアル・コミュニケーションズ)
- Richard Fauss (ウェスト・ヴァージニア州アーカイヴ)

ご支援くださったすべての方に、心から感謝したい。

*所属組織は出版(2003年)当時のまま。

本書の使い方

前書きでも述べたように、本書はワークショップに端を発し、対話形式で作成されたものである。対話の中で繰り返し唱えられたのが「わかりやすく！」という合言葉であった。

この「フィルム保存入門」は、映画技術というテーマを幅広くカバーしつつも、専門用語の使用は極力避けている。従って、管轄の所蔵品の中に映画フィルムが含まれているにもかかわらず、これまで実際に扱った経験がない、というような職員の方にも親しみやすい内容になっている。ほとんどの技術用語は初出時に定義を示し、用語解説も加えた。技術的な情報は可能な限り図表やグラフにまとめ、判断基準を設けた。ほとんどの章末には関連分野の「事例紹介」が添えられている。

章立ては、その道の専門家がフィルムを検証するところから、一般の閲覧者用の複製を収蔵するところまで、フィルム保存活動の一連の流れに添っている。論点はフィルム保存特有のテーマに絞った。文書館・図書館・博物館では、カタログリングに代表されるような重要な業務のノウハウは既に確立されている。従って、本書では取り上げる事象を映画に関係するものに特化した。

映画は我々とともに 100 年を超える歴史を歩んできた。形状も、上映環境も、使用目的も多岐に渡る。本書はその全貌を明らかにすることを目指しているのではない。あくまで、文書館・図書館・博物館にありがちな素材や環境に即して映画保存を描写することを目指している。本書は映画保存の基礎を身につけるためのものである。

一般論には例外がつきものであるが、コンパクトで実践的かつ網羅的な内容たることを目指し、専門的過ぎる技術や形状は省いて考えている。省略部分について調べたい場合は、書籍目録を参考にしていきたい。